

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	庭本 佳和
論文題目	バーナード経営学の展開 ―意味と生命を求めて―		
(論文内容の要旨)			
本論文は、現代経営学を基礎づける C. I. バーナードの基礎理論を手がかりにして、それ以降の意味論とオートポイエーシス理論の発展を取り込み、現代企業を取り巻く諸問題である倫理問題、環境問題を解明できるように新たな地平の経営理論の発展を目指す。すなわち経営学において、意味システムと生命体システムのメカニズムを組み込んだ「意味と生命の経営学」という構想の下に経営理論の再構築をはかり、バーナード理論の展開を行う。 本論文はまず、経営体を生命システムかつ意味システムであることを主張する。ここで生命システムは①水と大気循環をもつ「地球」、②微生物から人間に至る「生態的循環」、③人間活動からなる「社会」、④社会を構成する「経営体」、という包括関係ないし階層構造からなるとされる。④は③を、③は②を、②は①を超えては生きられない。これを生命の論理として、①や②に対する要素としての生命の関係が、当該生命の意味であるとしている。 各生命が自らを包含する他の生命との関係を取り結ぶ様式がその生命の意味であるとすれば、生命はより一般的・抽象的には意味システムといえる。意味システムとしての人間は、社会的存在として獲得した言語によって他の人間との協働を可能とし、生命の意味を超える「意味の過剰」を生み出したとする。この事態が生命システムの階層性を揺るがすまでになった状態が地球環境問題であり、経営体がこれに大きく加担していることが指摘される。生命システムとしての経営体は、生命の包括関係ないし階層性を生命の意味として、自らの意味システムに組み込む、新たな関係の構築が迫られているという認識が示される。バーナードの理論構築の方法と概念は、その可能性を切り開くものとされている。 この意味での、バーナードの人間観、協働観、社会観、組織観、管理観を貫く彼の自由観が着目される。「気ままに振る舞う自由」が、環境汚染をもたらした経済成長を支えたからである(M. ラーキン)。このような自由理解は、自然支配の自由でもある近代自由概念、さらには近代科学的方法に連なっている。しかし、現在の危機的状況を前に、この自由観が再構築されるべきとされる。このために、自由を責任との対概念として捉え、道德性の創造・受容・遵守のうちに自由の全体構造を見るバーナードの自由の理解が不可欠となる。 ついで、近代自由概念と関連する近代科学的方法が論じられる。近代科学的方法は世界の一部を抽象化する言語知、対象知であり、対象領域の分離・分析を行う。定義と仮定を限定して要素を絞り込み、その因果関係を明らかにする。この方法は大きな成果をあげたが、同時に、地球環境問題に象徴される社会的病理と深く結びついたこ			

とを指摘する。他方、身体知や行動知を駆使するバーナードの方法は、近代科学の対象的・客観的理解を超えて、無意識的、身体内的、行動的理解をも統合する「行為主体的な方法と理解」であるとされる。これは主体－客体という近代科学の二分法を抜け出ていると評価されている。この方法が自然性の回復を要請する「意味と生命の経営学」を構築する方法であるとされる。身体知・行動知が自然ないし生命に共鳴するものと主張される。

身体知・行動知を扱う場合に、しばしば論じられるのが、M. ポラニーの暗黙知であり、さらに行為者が同時に認識者である行為主体的存在であることは、内的視点に立つオートポイエーシスの概念に連続する。内的視点に立つバーナードの行為主体的方法はオートポイエティックであり、自らの方法として提示した参加的観察を無意識に超えていたと評価している。この方法に立脚した知識観は、意思決定論を展開する強力な武器であるとされる。

またバーナードの道徳的創造理論を組織価値と戦略の関係を重視する近年の研究の先駆けをなすものと理解し、経営戦略論を方向づけるものであるとする。地球環境問題への経営実践を担うための戦略枠組みを構成可能であると主張する。さらにバーナード理論を自己組織論、とりわけオートポイエーシス論から「生命システムないし意味システムとしての経営体」を見いだすことが試みられる。生命の意味を経営の意味として内在化し、理論化を図る「意味と生命の経営学」を構想することで地球環境問題を社会的責任として捉え、理念としての人間の自由と関連づけることが提唱されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、経営学に環境経営学とでも呼ぶべき新しい領域を開いた点で高く評価できる。ここでの環境は、企業活動に伴う社会的責任としての環境保全という意味だけではなく、自然環境から人間の生活全体に関わるシステムの中で企業経営を考えようとする理論体系を構想する。企業経営を合理的な経済行為であると理解するのではなく、生命体の連鎖としての体系の中での人間の集合的な行為とする理解への転換が試みられる。「意味と生命」を中心的な概念として企業経営が生命システムの中での営為としての意味づけがなされる中での環境に対しての視座として経営学が構想される。

このような視点は、経営学の今後の指針となり得る業績であり、利益追求に貢献する経営学ではない方向を示している。企業を含む社会の構成を生命体の連鎖としてとらえることによって、企業が果たすべき役割を分析する枠組みを提示している。

また、最先端の概念を導入して、最先端の理論と経営学における古典的業績を架橋することがなされていることも高く評価してよい。M. ポラニーを経営学の領域で最も早く導入したのは本論文著者であり、暗黙知概念を正確に導入した貢献は大きい。暗黙知に関しては、その後には不正確な理解が蔓延し、逆に本論文での使用のような理解がマイナーになっているため、その学問上の貢献は高く評価される。

本論文ではこのような主張を C. I. バーナードの理論の拡張として語っているが、その点の妥当性について、かなりの議論はありえる。バーナードの理論を読み込んで、バーナードが表現し得なかった関心を語るという作業は、バーナードを理論史的枠組みで理解することではなく、彼の思想を敷衍していく形でのバーナード理解ということになる。その展開は論理的必然ではなく、蓋然性の範囲にとどまるために、読み込みの妥当性についての疑問が提出されたとしても不思議ではない。

バーナードの時代においては、本論文でしばしば言及される自然科学の概念であるオートポイエーシスの概念は開発されておらず、バーナードが用いることのできた概念は限定されていた。彼の組織均衡論は化学平衡を想定したものであるといつてよく、十分に彼の意図を表限できなかったと考えられる。バーナードの組織理解をオートポイエーシスの概念で説明することは、バーナードの新たな解釈ではなく、オートポイエーシスとして語り直すことは必然ではなく、この語り直しはむしろ著者の独創として表現されるべきであると思われる。

もちろん、これは表現についての問題であり、その内容についての問題ではないが、本論文が経営学史をバーナード理論を通して眺めるという性格も持つために、バーナードそのものの理解が既存のものと距離があるために、バーナードの評価として理解することは難しい。豊富な経営学史の知識に裏付けられた叙述であるが故に、通説との距離感が取りにくく、そのため難解になっている。

ともあれ、経営学に新たな領域を付け加え、企業経営を再度人間的行為として位置づけようとする試みは重要であることは明らかである。

以上のような評価に基づき、本論文を博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成22年6月17日論文内容と、それに関連した試問を行い、合格と認めた。

学 識 確 認 の た め の 試 問 の 結 果

氏 名	庭本 佳和			
(試問の科目・方法・判定)				
	(科目)	(方法)	(結果)	(備考)
<u>専攻学術</u>				
	経営学原理	口頭	合格	
	経営組織	口頭	合格	
	経営戦略	口頭	合格	
<u>外国語</u>				
	英語	口頭	合格	
	ドイツ語	口頭	合格	
(試問の結果の要旨)				
上記のとおり、専攻学術および外国語の学力に関する試問の結果、本学大学院博士課程を修了したものと同等以上の学力を有することを確認した。				
平成22年6月17日				
試問担当者氏名	日置 弘一郎			
	末松 千尋			
	若林 直樹			